
英雄の息子は魔法が嫌い

GONZA

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

英雄の息子は魔法が嫌い

【Nコード】

N9174X

【作者名】

GONZA

【あらすじ】

英雄“千の呪文の男”ナギ・スプリングフィールドの息子であるアギサ・スプリングフィールドは魔法使いの息子だが、魔法が嫌いだった……………

気軽に感想や批評等書いて貰えると嬉しいです

プロローグ（前書き）

もう片方の作品の息抜きで書いた小説です

更新は不定期ですが、よろしくお願いします

プロローグ

——イギリスにはウェールズと言う小さな村がある。

その村は魔法使いの隠れ里で、1人の英雄の出身地であった。

「に、兄さん待ってよあ！」

「ネギ！早く来いよ！」

村の近くにある山へと繋がる、なだらかな丘を2人の少年が走っていた。

1人は7、8歳の赤み掛かった金色の髪毛で、気の強そうな目付きをした男の子だ。手に持った杖に器用に火を灯したり消したりしている。

もう一方の幼い方の男の子は3、4歳程度で赤い髪をしていて先に行く年長の男の子——兄の後ろを懸命に追い掛けている。

この二人こそ、“千の呪文の男”と呼ばれた英雄、ナギ・スプリングフィールドの息子である、ネギ・スプリングフィールドと、この物語の主人公であるアギサ・スプリングフィールドだ。

これは、まだ彼が何も知らない時期の穏やかな一幕である。

プロローグ（後書き）

フツと思いついて書いてみたら、かなり短かった……orz

疑問と疑惑（前書き）

一話を書き上げたので投稿。

序盤は基本的にアギサを視点に置いて話が進んでいきます。

暫くウェールズでの話が続くと思います。

疑問と疑惑

「——そうね、あなた達のお父さんはね、とっても有名な英雄、スーパーマンみたいな人だったのよ」

「スーパーマン？」

「かけえ！」

アギサが魔法学校から帰ってきたある日、ネギとアギサは従姉であるネカネ・スプリングフィールドから自分の父親の事を聞いていた。

ネギはスーパーマンが具体的にどういうモノか判らず疑問を浮かべるが、スーパーマンが理解出来たアギサは自分の父親の凄さ思わず、はしゃぎだしている。

「そう。誰もがピンチになったらどこからともなく現れて、必ず助けてくれる正義の味方よ」

「へー、スーパーマンがかっこいい！ネカネお姉ちゃんも助けられたことあるの？」

スーパーマンがわからないネギにネカネは分かりやすく噛み砕い

て教える。

ネギも漸く、その実態が判りネカネにはしゃぎながら質問をする。

「ふふつ、それは秘密よ?」

「ふーん。そっかあ」

「???」

ネカネは、悪戯っぽく笑いながら誤魔化してネギに言った。

ネギはその話題にさして興味を持たずに納得した様だったが、アギサは子供心にその解答に疑問を持った——何故、誤魔化すのかと。

実際は、ネカネはナギに助けられていない為、この様な答えだったのだがこの素朴な疑問はアギサの中でモヤモヤと、残っていた。

「さ、もうこの話はお終い。アギサは宿題やってらっしゃい。まだ残ってるんでしょう?」

「あ、うん。わかった」

「ネギー!アギサー!遊びに来たわよー!」

ネカネがパンパンと手を叩いて、アギサに宿題をするように促す。吃りながらも返事をして、宿題をしに自室へ行こうとすると、夕イミングを図ったようにネギの一歳年上の幼なじみのアーニヤが訪ねてきた。

「ネギ、俺は宿題するからアーニヤにそう言っといてくれ」

「わかったよ兄さん」

ネギはそう言って、行つてきまーす！と元氣良く出て行つた。

それを見届けるとネカネは家事をするために台所に行き、アギサも先程の疑問を片隅に追いやつて宿題をするために改めて部屋へ向かつた。

「じつちゃん！遊びに来たぜ！」

今日の分の宿題を済ませると、じつと家に籠もっているのが嫌いなアギサは、家を飛び出した。

ネギとアーニヤと一緒に遊ばうと村を探すが、山に行っているらしく二人の姿は無い。

このまま家に帰るのは癪なので、アギサはスタンの家へ遊びに行
った。

「珍しいの。坊主が此処に来るのは」

「ネギとアーニヤが山に行っちゃったばかりさ」

「ふんっ、そういう事か。どれ、何か出してやろう」

ニシシと笑うアギサをスタンは鼻で笑うが、アギサに飲み物を渡
す為にどっこいしょと呟きながら立ち上がる。なんだかんだ言っ
てもスタンは孫の様な存在のアギサ達がかawaiiのだろう。

「全く……お前を見ているとナギの奴を思い出すわい」

「親父を？」

「ああ、お前の様な悪ガキじゃったわい。あいつのしでかした騒ぎ
の後始末が何度あったか……。村が巻き込まれたこともあったし
な」

アギサもたまにいたずらをした事はあるが、大きな事をした覚え

は無かった。

せいぜい、蜂蜜を獲ろうと蜂の巣を切り落として蜂に追い掛けられたり、冬に氷の張った池でスケートをやろうとして池に落ちたり、メルディナ魔法学校で先生の机の中に蛙を10匹程放り込んだ事ぐらいしか無かった。

実際はそれが大きな事なのだが、本人に全く自覚は無い。

「あのバカは息子を置いて何をやってるんだか……………」

「……………」

魔法でヤカンに火を灯して、ココアを準備しながら呆れた様に呟くスタンに、アギサはさっきのネカネの件を言うか言うまいか迷った。

「——なあ、じっちゃん」

「ん？なんじゃ？」

そして、アギサは悩んだ末に疑問を聞く事にした。

「親父って正義の味方なのか？」

「っ！？ ……それを言ったのは誰じゃ？」

作ったココアをテーブルに置いたスタンは、アギサの質問に一瞬顔色を変えるが、直ぐに元の色に戻し、極力声色が変わらない様に注意して問う。

「え、えとネカネ姉ちゃん」

「あの小娘か……………」

それを敏感に感じたアギサは戸惑いながらも、答えるとスタンは呆れたように上を見ながら顔を手で覆う。

スタンはおもむろに立ち上がるとアギサの方へ歩いてきて、アギサの高さに合わせて屈む。

そして、ゆつくりと優しく抱き締めるとアギサの母親の遺伝子の方が強く出た金色の髪を撫でながら、優しく話します。

「アギサ。ナギの奴は正義の味方では無い。だが、お前達が誇れる親だ。其処を良く覚えて置くんじゃ」

「う、うん」

何時ものぶつきらばうな感じの様子とは違うスタンに戸惑いながらも、アギサはしっかりと返事をする。

「さて、この話はもう終わりじゃ。そのココアを飲んだら帰りなさい」

「わかった」

アギサは放置されて若干温くなったココアを飲むと、ネカネが待つ家に帰った。

スタンはアギサがココアを飲んでいる間ずっと物思いに耽っていた。

スタンが途中で「自分の息子の近くに居てやらなくて、何が正義の味方か………」と呟いたのが妙に印象的だった。

疑問と疑惑（後書き）

出番の多さがスタン・ネギって言う不思議（笑）

英雄と戦争（前書き）

微鬱？な話です

全然話が進まない……………

麻帆良入りはいつになるやら

英雄と戦争

「けっ！教えてくれないんだったら自分で調べてやるよ！」

結局、父親に纏わる話を聞けなかったアギサは、休みが明けて魔法学校に戻ると一時間目から授業をサボってぶつくさ言いながら資料室に忍び込んで自分の親についての資料を探していた。

アギサは教師に悪戯をしたり、偶に授業を受けずに遊び回ったりするが、成績は座学、実技共に極めて優秀な成績だった。

その為、アギサは悪戯をするのは兎も角あの“英雄の息子”という事も手伝い、授業についてはサボったりしても余りとやかく言われなかった。

「うーん……………ねえなあ……………」

片っ端から資料を開いて探し始めて3時間程経つが、ナギに関するものは一向に見つからない。

アギサはこの点にも疑問を感じていた。

「親父が英雄だってんなら、何で資料がねえんだよ……………」

幾ら貯蓄されている資料が膨大だとしても、3時間も探していれば一つぐらい見つかつてもいいものだ。

しかし、ナギ・スプリングフィールドの“ナ”の字も出ないのである。

これにアギサは疑問を感じていた。

そう――

――わざと隠されているのでは無いかと

探し続けて早5時間、アギサは最早意地になってナギについての資料を探していた。

そして、アギサは遂に資料を見つけた。

「あつた……………」

アギサは5時間ぶつ 続けて探した苦労が報われ、若干感動をしつつ呟いた。

資料は認識障害を掛けて巧妙に床下に隠されていた。

本棚から本棚へと歩いていく途中に踏んだ感触の違う部分を見つけ、疑問に思つてレジストを掛けてみたら案の定、隠し棚だった。

「（ゴクッ）」

隠されていた物を前にし、思わず生唾を飲み込む。

そして、おそろおそろ資料に手を伸ばす――

「コラッ！」

「ひゃっ!？」

背後から急に声を掛けられ、びっくりして飛び上がりながらもサツと資料を後ろに隠して、振り向く。

「なっ、なんすか……………つて先生じゃん」

「先生じゃんとは何だ、先生じゃんとは?ここで何をしている?」

呆れたように話すのは、主にアギサが悪戯をした時に“お世話になる”先生だった。

「え、えと、ちょっと調べ物をする為に入ったんですけど……駄目でしたかね？」

「いや、授業をサボるのは頂けないが、感心な事じゃないか」

最悪の場合は後ろ手で隠している資料を持って逃げ出そうと画策しながら聞くと、意外にも多少の苦笑と褒め称えだった。

「あ、はい、まあ、あはは………」

「???資料室が空いてるから気になって見に来たが、悪戯をしている訳では無いし大丈夫だな。

僕はもう戻るから、調べ終わったら先生の誰かに声を掛けてくれ」

アギサの何とも曖昧な返事に疑問を感じながらも、その先生は部屋を荒らすなよと言、言ってからその場を去っていった。

「へーい。……………ふう」

アギサは表面上は、にこやかにしながら手を振るが、完全にその姿が見えなくなるとため息を着いて額の冷たい汗を拭う。

そして一ご散ると、改めてその資料を手に取った。

資料は幻術の応用で空間に映像を映し出す記憶媒体で、レッテルには“大戦後期 ナギ・スプリングフィールド”と記してあった。

「……………いくぜ」

アギサは自分に言い聞かせる様に呟くと、再生ボタンを押した。ヴオンツつと科学的な音とともに再生されて出てきたのはかなり若い頃と思われるナギ・スプリングフィールドだった。

「これが親父かー。ネギに似てるな……………」

しかもイケメンだし、とアギサは恨めしげにぼそりと言う。

実際はアギサもイケメンの部類に入るのだが、本人に自覚は微塵もない。

『食らえ！ 千の雷！』

「うわっ、高位殲滅魔法を無詠唱かよ……………」

アギサは“千の雷”を知識でこそは知っていたが無論、詠唱は出来ない。

ナギの卓越した才能とホイホイぶち噛ます魔力量に尊敬を通り越して、引き始めるアギサ。

「うん……………やっぱり親父は英雄なのか？」

——「ん？」

魔法使いとして目指す高みに居るナギに、アギサは疑惑を無くして再生を停止しようとしたが、ある映像が気になって其れをぐつと顔を近付ける。

それは、殲滅魔法“千の雷”の矛先だった。

アギサは最初、魔属や悪魔に放っているんだろうと考えていた。

しかし、

「なんだよ……………コレ……………」

矛先に居るのは“人”だった。

千の雷の効果範囲に居た相手は、“消えていた”

死体さえ残さずに綺麗に“蒸発”していた。

しかも、発動させたナギの顔に浮かんでいるのは「悲しみ」や「

怒り」でも無い、

—— 笑みだった。

「一体、何、なんだよ………うぷっ！」

アギサは人の醜い部分を直に見せられた気がして吐き気が込み上げてくる。

アギサは急いで媒体を止め、元の場所に戻すと全力でその場から逃げ出した。

トイレで一通り胃のなかのモノを吐き出したアギサは少しフラフラとしながら、先生に資料室の鎖錠を頼むために職員室へと赴いた。

「—— 失礼します」

「ん？ネカネ姉ちゃん？」

すると、慌ただしく職員室からネカネが出てきた。

ネカネはアギサを見咎めると、小走りで近付いて来てアギサの手を取ると学校の出口の方へ足を向けた。

「ちょ、ネカネ姉ちゃん？俺、先生に用があるんだけど！？」

「他の人に頼みなさい」

最初、アギサは訳が分からず硬直していたが直ぐに再起動しネカネに訴えるがネカネはにべもなく切り捨てる。

ムツと来たアギサが文句を言おうとするが、ネカネの言葉に文句は押し留められた。

「ネギが湖に落ちたらしいわ」

「っ！？」

アギサの弟であるネギが湖に落ちた。これには、アギサも二の句が告げなかった。

しかも、今は冬だ。

アギサも湖に落ちた事はあるが、ネギより年齢が上の時だ。

今の時期の湖の水温は幼い子供だったらショック死するレベルの冷たさである。

「ネカネ姉ちゃん！急ぐぞ！」

「ええ！っきゃっ！？」

アギサは慌て、身体強化の魔法である戦いの旋律を詠唱しネカネをお姫様抱っこの形で抱えると全速力で村へ向かった。

この時は、資料室での一件はすっかり頭から抜け落ちていた。

——そう。
“この時は”

英雄と戦争（後書き）

不気味な終わり方で次回へ

感想やアドバイスを貰えたら嬉しいです

正義の味方と魔法使い（前書き）

注意

ネカネ好きにはかなりキツイ内容になります

正義の味方と魔法使い

「「ネギ！大丈夫！？」」

「あ………に、兄さんとネカネ、姉ちゃん………今日は学校じゃ………なの？」

「おやまあ、あんた達帰って来たのかい？」

急いで村に戻ったアギサとネカネを迎えたのは、ベッドに入り氷嚢を額に載せた顔の赤いネギと、ネギを看病してくれていたらしいアーニヤの母親だった。

「学校は？じゃねえよ！お前が心配だから、飛んで帰ってきたに決まってるじゃんかよ！」

「えへへ………ありがと………ね。兄さん」

アギサが心配そうにしながら怒った様に怒鳴るとネギは嬉しそうに荒い呼吸で返事をする。

「ふふふ、仲が良いもんだねえ。熱は40度近くあるが、命に別状はないよ。安静にしとりゃ治るもんさ」

「はい……。本当にありがとうございました」

アーニヤの母親はアギサとネギの様子に微笑を零しながら、ネカネにネギの症状を伝えると、あたしは家の仕事があるんでねと言って帰って行った。

「ふう……。それで、ネギ？何で湖なんかに落ちたの？今は氷は張っていないでしょう？」

「そうだぜネギ？俺でも飛び込みはしないぜ」

アーニヤの母親が家の扉を閉めた音を聞くと、ネカネは一度ため息をついてネギを咎める口調で問いたです。

「だって……。危なく、なったら……。お父さんが助けにくる……から」

「「はあ？」」「

ネギの答えにネカネとアギサは同時に声を上げる。

しかし、声色は二人ともそれぞれ毛色が違っていた。

ネカネのは、純粹に疑問の声。

アギサの声には――怒りが籠もっていた。

「お、父さんは……正義の……味方でしょ……？だから……僕が危なくなったら……助けに来て、くれる……んだ」

「ネギ……」

「――」。

ネカネはその歪んだ考えに絶句をしていた。

アギサの脳裏に“あの”光景がフラッシュバックしていた。

ナギの子供の様な純粹な笑み、広大な範囲に降り注ぐ死の雷、そして、

――蒸発した人々

「……………よ」

「あ、アギサ？」

その時、ネカネの耳に届いたアギサの声は極僅かだった。
だが、それは背筋が寒くなるような殺気を孕んだ声色で、ネカネは思わず声を掛ける。

「っふざけるな！！！」

「アギサ！！！」

アギサは一喝すると、ネギの胸元を掴み挙げてそのまま宙ずりにする。

ネカネが慌ててアギサを止めようとするが、アギサは自身に身体強化の魔法を掛けていてアギサの腕はびくともしない。

「あんな奴が正義の味方だと……………？英雄だと！？ふざけるな！！！」

「——っ！」

「アギサ止めなさい！ネギは呼吸が出来てないわ！！」

「っ！？…………ちっ！」

アギサの怒声にネギは言い返そうとするが、衣服が首を圧迫して
いて反論するどころか、呼吸をするのさえ困難になり段々と熱にう
なされて赤かった顔が白くなっていく。

ネカネがそれを見て必死でアギサを抑えると、流石にヤバいと感じ
じたのかアギサも手を離す。

「かはっ、ゲホッ、ゴホッ！」

「ネギ、大丈夫？」

「ゲホッゲホッ…………父さんは、正義の…味方だ」

「——くそっ」

「待ちなさい！アギサ！！」

アギサが手を離すと、ネギは酸素を求めて激しく喘ぐ。ネカネもネギに駆け寄ってその背中を擦って楽になるようにする。アギサはそれを見て、苦々しげに言い捨てる。ネカネの制止も聞かずに足音荒く二階の自室へと向かった。

「——アギサ、いる？」

あれから数時間経ち、ネギの様子が落ち着いたのでかふて寝をしているアギサの下にネカネが来た。

ネカネはアギサが何も言わずに居ると、入るわよと一声掛けてから扉を開けて入ってきた。

「ねえ、アギサ。なんでネギにあんなことを言ったの？」

「……………」

ネカネはアギサに問いかけるが、アギサは何も言わない。

「確かに、あんな理由で湖に飛び込んだネギも「ネカネ姉ちゃん」な、何？」

アギサが激昂した理由がネギが原因だと思っっているネカネの言葉を遮って、アギサが質問をする。

「戦争についてどう思う？」

「え？悪い事だと思うわ」

「…………じゃあ、人殺しは？」

「当然、悪い事よ。なんでそんな事を聞くの？」

ネカネはアギサの質問に対して淀み無く、自信を持って答えている。
く。

しかし、アギサがそれを冷めた目で見ている事には気付かなかった。

「…………じゃあさ、“戦争で沢山人を殺した”ナギ・スプリングフィールドについては？」

「つつ！？そ、それは……………」

ネカネはこの問いかけに頭をハンマーで叩かれた様な衝撃を受けた。

勿論、ネカネはナギが戦争に参加し英雄となった事は知っている。だが、“戦争に参加し、人を殺した”事実を考えずに只人から聞かされる逸話に目を輝かせ、憧れていたただだった。

「それは、戦争を早く止める為で仕方が無かったのよ」

「ふうん……………。だけど、“アイツ”は笑いながら魔法を放っていた」

ネカネが考えた末に出した答えも虚しくアギサは叩き伏せる。

もし、ナギが神妙な面持ちで魔法を使っていたのならアギサの印象も変わっていた。

悩み、苦しんだ末に人を殺すという結論に至ってしまったのかと。

しかし、現実違った。

「笑ってるんだぜ……………？一回の魔法でも人を沢山、沢山殺してるのに。」

死体も残さずに蒸発させたつてのに……………！
人が…消えたんだぞ！！

なあ……なんでだよ！？なんでアイツが英雄なんだよ！！！！
魔法使いの憧れじゃなかったのかよ！！！！魔法使いってのの終着
点は大量殺人犯なのかよ！！！！！！！！」

「アギサ……………」

アギサは自分があの光景を思い出して、手を震わせて泣いている
のにも気付かずに語気を段々と荒げていく。

ネカネはアギサの涙を拭き取るうと手を伸ばす。

「触るな！！」

「っ、アギサ！大丈夫よ！来るなあ！！」っ！？」

だが、アギサはネカネの手を弾いて払いのける。

ネカネはアギサを落ち着かせようと近付くがアギサの一喝で歩み
を止める。

「来るな……………」

アギサも魔法学校ではナギ・スプリングフィールドの様な偉大な
魔法使いになれ、と言われて一生懸命勉強してきた。

「来るな……………！」

アギサにとって、もはや魔法使いは恐怖の対象でしかなかった。

「来るな！！！！」

笑いながら相手を抹殺する。

もはや、アギサにはネカネさえも酷く、醜く見えていた。

「うわああああ！！！！！！」

「アギサッ！！！！」

アギサは絶叫をすると自身に身体強化を施し、窓を割って外へ出ると山へと走っていった。

正義の味方と魔法使い（後書き）

本来はアギサとネギは中の良い兄弟の筈がナギ軽率さ（？）の所為で仲違い、というか最早家庭内崩壊へと…………

感想や意見等気軽によろしくお願いしますm（——）m

尊敬と立派（前書き）

なんやかんやで毎日更新している………一つ一つが短いけどor
z

尊敬と立派

あれから1週間が経った。

あの日以降、アギサは家に帰って居らず、ネカネやネギにも会っていない。

魔法学校にも行かなくなり、昼間はネギ達が遊びに来ないような場所で1人で遊び回り、夜になるとスタンの家に泊めてもらいう生活を送り返している。

スタンの家に転がり込んだのは、アギサが彼には不思議と嫌悪感を湧かなかったからである。

アギサがあの日、夜に突然泣き腫らした目をして訪ねていってもスタンは何も言わずに中に入れてくれて、暖かいご飯を出してくれた。

ネカネが偶に来るようだが、スタンが追いついてくれているおかげでアギサは1度もネカネに会わずに済んでいる。

魔法も使っていない。

魔法を使おうとすると、どうしてもナギ・スプリングフィールドのあの光景がフラッシュバックしてしまうのだ。

しかし、別段魔法を使わなくてもアギサには何も問題はなかった。魔法学校の生徒は実生活の中でも日常的に身体強化の魔法を掛けている生徒も居たが、アギサは身体を動かす事が好きだったのでそ

ういう事はしていなかった。

成績も極めて優秀で将来有望だと教師から持て囃されて居たが未練などなかった。

只、自分は――

「アギサ君？」

山の頂上にある一本の大きな木に登って自分の住んでいる村をぼんやりと見ながら思考に耽つて居ると、ふと下から声を掛けられる。声のした方向を見ると、優しそうな顔立ちに無精髭を生やし、タバコを啜えた男がスーツのポケットに手をつ込んで佇んでいた。

「……タカミチか」

「やあ、久々にこっちに来てね。挨拶をしておこうと思ったんだ。」

手を振りながら気さくに話すタカミチにアギサもすると、あつという間にタカミチの前まで降りる。

「タバコこんなトコで捨てるなよ？山火事になったら目も当てらん

ねえ」

「はははは、わかってるよ」

タカミチから漂ってくるタバコのツンとする匂いに顔を顰めながら忠告すると、タカミチも笑いながら上着のポケットから携帯型の灰皿を取り出す。

「て言うか此処までわざわざスーツで来たのかよ？頂上まで一時間ちよっと掛かるぜ？」

「普段からあちこち飛び回ってるからね。この位は朝飯前さ」

アギサが山を降りる道へと歩きながら話すとタカミチも一緒に着いてくる。

タカミチの言葉にふーんと頷くが、ふと或る点に気付いてピタリと足を止める。

「そういえば、タカミチってアイツ（ナギ）の仲間だったんだっけ」

「……………そうだよ」

アギサが以前は親父と呼んでいたナギを“アイツ”と呼んだ事に

タカミチはピクリと反応するが、当たり障りの無い返事を返す。

「——そうか」

アギサもそれだけ言つと、また黙つて歩きだす。

「タカミチがこっちに來た理由つて俺だろ？」

「……………まあね」

アギサもタカミチも暫く何も言わずに歩くが、アギサはポツリと核心を突く。

タカミチも誤魔化し切れないと踏んだのか、肯定する。

「不思議だな……………タカミチは“アイツ”と一緒に筈なのに嫌な感じがしない」

「それはありがたいね」

アギサが微笑を零しながらの言葉にタカミチは苦笑をする。

「——なあ、タカミチ」

「なんだい？」

アギサはクルリと振り向くと、真剣な顔でタカミチに問う。

「ナギ・スプリングフィールドは尊敬できる人物だったか？」

「……………」

タカミチはアギサの問いかけに即答をしようとしたが、その目を見て思いとどまる。

アギサの目は、嘘は吐くなとありありと語っていた。

「……………いや、ナギは尊敬できる人物では無かったよ」

そして、沈黙の末にタカミチが出した答えは否定だった。

「……………わかつ「だが——」ん？」

だが、了解を言おうとしたアギサの言葉を遮って、続きを喋る。

「——立派な男だったよ」

「っ!?!……………そうか。それと、アイツは生きているのか?」

「ああ、きつと生きているよ」

「……………フツ、わかった。ありがとな」

タカミチの台詞にアギサは面食らった顔をするが、フツと笑って踵を返すとまた歩きだした。

タカミチはタカミチで一瞬惚けていたが、慌てアギサの後ろを歩きだす。

「（驚いたなあ……………）」

タカミチが惚けていたのは、アギサの笑みがナギの面影を遺していたからだった。

「（アギサ君やっぱり、君は——）」

——あの人の息子だよ。

「タカミチ」

「ん、なんだい？」

「……………頼みたい事があるんだ」

そう言い放ったアギサの目は、火の点いた目だった。

尊敬と立派（後書き）

いいタイトルが思いつかなくてタイトルが適当に

次回で麻帆良入りですかね

感想や意見等あったら気軽によろしくお願いしますm———m

旅立ちと故郷（前書き）

結局、麻帆良入りは次回です。
すみません

旅立ちと故郷

「……………ふう」

メルディナの魔法学校。その校長室で、アギサやネギの祖父でもある校長は一人ため息を吐いていた。

問題は、勿論アギサの事だ。

アギサは度々、悪戯をして祖父であり校長でもある彼を困らせて居たが、今回は大事だった。

アギサが不登校になった。

ネカネやネギと父親について大喧嘩をして、家を飛び出してそれ以来家に帰っていないとネカネに泣き付かれた時は大騒ぎだった。

最初、苛められたのかと思われたが、直ぐにその疑いは晴れた。アギサは、その活発で明るい性格から男女問わずに親しまれており、成績も優秀で偶に他生徒に教えたりしていたという。

原因は直ぐに見つかった。

家に帰る直前まで居たらしい資料室を探してみると、一般生徒のレベルの認識疎開で隠ぺいされていたナギに関する映像資料が机の上に置いてあったのだ。

この資料は色々と生徒の教育上良くないと判断し、床下に隠したが寄りによって実の子供がこれを見つけてしまった。

彼はこの時ほど、ナギのお気楽さを恨んだ事はなかった。

ナギを知るものがこの映像を見れば、ナギが嬉々として虐殺してる訳では無いとわかるが、普通は映像で観たままの姿に捉えるだろう。

「タカミチ殿に説得を頼んだが………」

この問題は自分達の手には負えないと、実際のナギを知っていて紅き翼のメンバーであり、アギサの説得を頼んだが、アギサは何を思ったのかタカミチに弟子入りを志願したのだ。

タカミチも自分には日本の麻帆良学園での教師の仕事があると言ったらしいが、アギサはそれだったら麻帆良まで着いていくと言って聞かないらしい。

「メガロは“そっちの判断に任せる”としか返ってこんし………」

校長としては麻帆良に行くのは認められない。

しかし、このままでは埒が開かないとメルディナ魔法学校の上位組織であるメガロに、不登校になった事を言わずに“アギサがタカミチに弟子入りをして麻帆良に行きたいと言ってるのだがどうれば良いのかという旨の文書を送り、指示を仰いだ所、こちらに丸投げだった。

よくよく考えてみれば、麻帆良学園もメガロの下位組織の為、上の連中として麻帆良でもメルディナでもどっちでもいいのだろう。結局、彼はアギサをタカミチに預けることにした。

「親子二代とも学校を中退とは……………血は争えんというか何というか……………」

とりあえず一言、一言だけ言いたかった。

「どうしてこうなった……………」

彼の魂の嘆きである。

「はっはー！タカミチ！飛行場つてでっけえなあ！」

「はははは、あまり、はしゃぎ過ぎないようにね」

イギリスにある飛行場、そこにアギサとタカミチの姿があった。アギサは本来の快活さと、あの日以来、何となく息苦しさを感

ていた村から解放された事も相まってかなりテンションが高い。

「それでアギサ君、日本語の方は大丈夫かい？」

「ああ、ばっちりさ！」

タカミチが日本語で問いかけると、アギサも同じく日本語で返す。アギサの日本語にはちょっと不安な部分が見受けられるが概ね大丈夫そうだと、タカミチは笑いながら頷く。

タカミチがアギサの弟子入りを承諾して以来、アギサは日本に行くために文字どおり、机にかじりついて日本語の勉強した。

タカミチも滞在期間を延ばして最初の数日は勉強を手伝ってくれた。

アギサの元々の頭脳明晰さと、子供特有の思考の柔軟性、更にタカミチという優秀な教師が居たおかげでアギサは水を得た魚の様に日本語を修得た。

本来は日本語を覚える期限は2ヶ月だったのを、たった1ヶ月で済ませた物だから一旦麻帆良に戻って、アギサの入学手続きをしていたタカミチを仰天させたのは余談である。

「なあ、タカミチ！麻帆良ってどんなところなんだ？」

「そうだね、良いところだよ。僕は君と同じぐらいの年齢の女の子

の保護者なんだけど、きつとその子とも仲良くなれると思うよ」

「ふーん。じゃあ「アギサ！」げっ……………」

アギサが何か話そうとすると、後ろから大声で呼び止められる。
アギサが振り向くと、其処には走って来たらしく、息が荒いネカ
ネが立っていた。

数ヶ月振りに見るネカネは、以前とかなり変わっていた。
頬は痩け、目には隈があつてかなりやつれていた。

「……………」

「……………」

ネカネは何か言おうとして思いとどまり、何か言おうとするのル
ープを繰り返す。

アギサはそれを仏頂面をしながら眺めているが、ふとクルリと踵
を返す。

「……………行ってきます」

「っ！？」

そして、それだけボソリと言って飛行機に乗る為に走った。

タカミチも苦笑をしながら、それに続いた。

「挨拶はあれだけで良かったのかい？」

「いいんだよあれで」

飛行機に乗り込み、人心地付いた所にタカミチが問いかけるとアギサは依然、仏頂面のまま言葉を返す。

「それに……………」

「うん？」

「何も言わずに出ていったアイツよりマシだ」

「ぷっ……………くくっ…！確かにね」

タカミチはアギサの父親を明らかに意識した言葉に吹き出してしまった。

タカミチからナギの姿を聞いてから、アギサは明確な拒絶はしなくなった。

実際にナギを見て、一緒に行動をしていた自分の言葉を聞いたのがよかったのだらうと、タカミチはちよつと自意識気味に考えていた。まあ、事実なのだが。

「なんだよー？なんか可笑しいか？」

「くくっ…！いや、なんでないよただ——」

——君のその表情が彼に^{ナギ}あまりに似ていてね。

そう言うと、アギサが怒りだすのは目に見えているのでタカミチは何も言わない。

アギサとタカミチを載せた飛行機はイギリスから日本へ向けて、轟音を立てて飛び立った。

旅立ちと故郷（後書き）

次回麻帆良に入ります。

原作までは、だらだらとほのぼのを書く予定

因みに、ヒロインはのどか、木乃香と候補であやか、亜子、刹那、明日菜等を考えています。

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、たんのう堪能してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n9174x/>

英雄の息子は魔法が嫌い

2011年10月29日15時34分発行